

メリメにおける合理主義と幻想

——*La Vénus d'Ille* を中心に——

宮 内 達 夫

序

メリメは1857年2月18日付の Madame de la Rochejaquelein 宛の手紙⁽¹⁾で

Avez-vous lu une histoire de revenants que j'ai faite et qui s'appelle la *Vénus d'Ille*? C'est suivant moi mon chef-d'œuvre.

と言っている。これは多くの研究者が好んで引用する言葉だが、たしかにメリメ自身自作の中でこの作品を特に気に入っていたようである。また、これはメリメの諸作中一般に評価の高い作品でもある。もっとも、一般の評価は *La Vénus d'Ille* の怪奇譚としての完成度の高さに集中しており、筆者もその点では同じ印象を持っているが、メリメの自賛の理由は、そればかりではないようにも思える。上の言葉は、手紙の中で幽霊の話をしたついでにメリメが持ちだしてきたものである。そしてメリメは同じ手紙の中で、次のようにも言っている。

C'est assez ridicule d'écrire des contes à mon âge, [...] mais comment faire, quand on a cette démangeaison funeste d'écrire, pour s'en empêcher? [...] Je ne suis plus capable d'un effort d'imagination qui dure. Encore moins d'un ouvrage de raisonnement destiné à éclairer le monde. Peut-être puis-je écrire des pages d'histoire ; mais on me reprochera d'être insensible et sceptique parce que je crois que le premier devoir de l'historien c'est d'être froid et juste.

物語を書くことと歴史を研究すること、豊かな想像の世界に身を委ねること

と禁欲的に乾いた事実を解明してゆくこと、このいずれをもメリメは求めている。そして、確実な事実を丹念に積み重ねていく方法論を文学にも導入しようとしたのである。メリメの一生を通して見れば、この試みは決してうまくいったとは言えないと思える。メリメも、ロマン主義の最盛期に精神形成しながらあくまで合理性を追及した自分の一生について、晩年になるに従って、かなり苦渋に満ちた感想を述べるようになる。しかし少なくとも *La Vénus d'Ille* は上のような観点から見てもメリメ自身にとって成功作であった。そして、筆者は、メリメがこの作品を自賛していることに彼の世界観の表現を見るのである。以下本論では、学者メリメと文学者メリメが共存する作品として、*La Vénus d'Ille* を検討し、メリメの合理主義と文学の関係を考えてみたいと思う。

I-1. *La Vénus d'Ille* 執筆前後のメリメ

La Vénus d'Ille は、1837年5月15日、*Revue des Deux Mondes* に発表された。この同じ年にメリメは *Essai sur l'architecture religieuse au moyen âge particulièrement en France* という中世美術に関する論文を刊行している⁽²⁾。この論文は、現代の中世美術研究の水準から見た評価はさておいて、メリメにとってはかなり重要な意味を持つものである。メリメが生涯の大半を捧げた仕事は、歴史記念建造物総監督官として中世の文化財を保護修復することであった。その職に就いたのが1834年5月、その後1837年までに南部地方（1834年）、西部地方（1835年）、アルザス地方（1836年）、と三度の調査旅行を行い、その結果をまとめて *Notes d'un voyage dans le midi de la France*（1835年7月）、*Notes d'un voyage dans l'ouest de la France*（1836年10月）を出している⁽³⁾。そして、上記の論文は、歴史記念建造物総監督官就任後約三年間に、調査現場での経験や書物による研究を通してメリメが確立していった方法論、

合理主義的中世美術解釈の方針を明確に打ちだしたもののなのである。この時期に *La Vénus d'Ille* が書かれたことは、メリメがこの作品を傑作であると自認していることとおそらく無関係ではない。メリメは一生変わることのない思想・信条にこのうえなく適った職を得、その充実感のなかで、すでに *Mosaïque* で会得していた小説技法を駆使してこの *la Vénus d'Ille* を書いたのである。メリメは広範な読書の中から主題を選び、実体験にもとづいた様々なエピソードをちりばめて肉付し、全体を巧みに構成して、読後感の心地好い作品をまとめあげる。そして多くの場合、特定の具体的な読者に向けたメッセージが随所に盛り込まれている。*La Vénus d'Ille* においては、主題の選び方、エピソードの効果、そしてメッセージの伝え方のどれもが非常に巧妙で、メリメの創作意図が理想的な形で実を結んだように思えるのである。役人としての職務と文学創作が、少なくとも *La Vénus d'Ille* 執筆の時期のメリメにとっては、矛盾なく併存しうるものだった。それは、主題の選び方、調査旅行の経験の生かし方がうまくいったためだと思えるのである。次にその点について検討してみよう。

I-2. *La Vénus d'Ille* の sources

La Vénus d'Ille の sources の確定に関する議論は専門の研究書に譲るが⁴⁾、本論では、次の二点について若干の考察を試みたいと思う。その第一は、この青銅のヴィーナス像の話はメリメの創作ではなくて、いわば出来合いのものをそのまま拝借したのだが、それがメリメの常套手段だったということである。メリメは必ず、人から伝え聞いた奇談や、特に書物によって知った話をもとに小説を書く。物語の骨組みには既存のものを用いる。このことをメリメの作家としての想像力の欠如だ、とする解釈も成り立ち得るが、メリメは想像力を積極的には評価しないのである。P. Moreau は《… Mérimée se défie [...] de l'imagination, qui fausse les choses.》⁵⁾ と言っている。自らの想像

力で新しい物語を創り出すより、すでにある物語に新しい衣を着せることのほうが、メリメの作家としての資質により適した方法だったのである。また、J. Decottignies はメリメの幻想小説の佳作 *Il Viccolo di Madama Lucrezia* が、ホフマンの小説の巧妙なパロディであることを実証しているが⁽⁶⁾、メリメの作品はすべて広い意味でのパロディ、つまり小説についての小説であると言えなくはないのである。このことはここでの考察の第二点と関連してくる。J. Mallion と P. Salomon は、《La légende dont s'est inspiré Mérimée dans *La Vénus d'Ille* était assez répandue dans le public à l'époque où il écrit sa nouvelle.》⁽⁷⁾ ということを指摘している。たしかにメリメには、読者が作品の主題や題材に親しんでいることを小説を書くときのひとつの前提としていところがある。青銅のヴィーナス像の物語は、メリメがエピグラフに引くルキアノスの時代から中世を経て延々と語りつがれてきたものである。無論メリメは話の舞台を現代に移し変えてはいる。しかし当時の読者は *La Vénus d'Ille* を読んで、青銅のヴィーナス像の話をもう一度楽しんだにちがいないのである。後に、Eloi Johanneau との往復書簡で *La Vénus d'Ille* の出典が話題になった時、メリメは、《Je suis bien fier que ma petite drôlerie ait été prise un instant au sérieux par un savant tel que vous.》⁽⁸⁾ と書き送っている。そういういわばペダンティックな興味を読者が持つこともメリメは小説の効果のひとつとして計算していたのではなからうか。そして、このメリメの示す博識は、調査旅行での実体験を作品に盛り込むことによって一層効果を増すのである。

I-3. 調査旅行の思い出

小説の骨組みとなるものを青銅のヴィーナス像の伝説から借りてきたメリメは、その舞台を現代に移す。そして物語の肉付けとなる細部に今度は調査旅行

の体験を用いるのである。このことは従来から多くの研究者によって指摘されてきたことである。この作品とメリメの実体験との具体的な照応についての詳細は Pléiade 版や Garnier 版の註に譲るが、ここでも簡単に触れておきたいと思う。まず我々は、《Je descendais le dernier coteau du Canigou...》⁽⁹⁾ とこの数奇な事件を語り始める考古学者にメリメ自身の姿を見る。また、そこに出てくる地名はすべてメリメが実際に訪れた場所であり、登場人物にはメリメが旅行中に会った人々の面影が忍ばれるのである。例えば、《En face était le Canigou, d'un aspect admirable en tout temps, mais qui me parut ce soir-là la plus belle montagne du monde, éclairé qu'il était par une lune resplendissante.》⁽¹⁰⁾ というところなど、同様の Canigou 山に対する賛辞が *Notes d'un voyage dans le midi de la France* 中にも見られ、*La Vénus d'Ille* の細部の生き生きとした描写に、歴史記念建造物総監督官メリメの調査旅行中の印象が強く反映していることを示す好例となっている。ちなみに P. Trahard が《Tout voyage excite dans l'âme d'un artiste des émotions qui se gravent dans ses souvenirs et qui deviennent la source d'inspirations fécondes》というメリメ自身の言葉を引用して指摘するように、《*La Vénus d'Ille* est un souvenir de voyage.》なのである⁽¹¹⁾。語り手を親切にもてなす de Peyrehorade の描き方に、生涯の友人となる Jaubert de Passa と知りあったメリメの喜びを見ることもできよう。しかし、メリメは感傷にひたるためにこの小説を書いたわけではもちろんない。この時期のメリメは過去を懐かしむよりは目を未来に向けていた。自らの理想とする世界と現実との間に本質的な矛盾はなかった。読書による知識と実体験とをうまく交ぜ合わせて人を楽しませる小説を書く術をすでに体得していた。そしてメリメが小説を書く目的のひとつは、共通した世界観をもつ仲間たちと、その世界観の確かさを再確認しあうことなのである。次章ではその点について考えてみたいと思う。

II-1. 南仏の考古学者のカリカチュアーとしての *La Vénus d'Ille*

歴史記念建造物総監督官メリメの調査旅行の思い出として *La Vénus d'Ille* を把えるとき興味深いのは、ヴィーナス像の台石に刻まれた銘に関する議論である。M. Parturier や J. Mallion・P. Salomon の指摘するように、これは実在した Roussillon 地方の考古学者のカリカチュアーなのである。この考古学者は Pierre Puiggari と言い、*La Vénus d'Ille* の中では、アルフォンスの婚約者である Mlle de Puygarrig にその名前が使われているが、*Notes d'un voyage dans le midi de la France* に関してメリメを激しく批判した人物であった。Elne の修道院にあった碑文のメリメの解釈に対してであったこの批判を、メリメは、Jaubert de Pssa の助言もあって、反論に価しないものとして一応無視したようである⁹⁴。この事件の戯画化は *La Vénus d'Ille* 執筆動機のひとつとして考えてもよいが、メリメ自身の中世美術研究方法論の正当化という一面も忘れてはならないだろう。物語とは直接関係のないメッセージが作品にこめられていることはメリメ文学の特徴のひとつと言えるであろう。それは脱線というかたちをとってややもすると作品の統一感を弱める危険性があるのはたしかである。しかし、*La Vénus d'Ille* では、de Peyrehorade と語り手の議論は物語の結末を暗示する伏線としても機能していて、そこにもこの作品の成功の要因があるように思える。つまり、*La Vénus d'Ille* は、メリメの歴史記念建造物総監督官としての職業上の経験が文学作品の中にうまく生かされているのである。

II-2. Vienne のヴィーナス像と *La Vénus d'Ille*

ここで、この物語の主人公である青銅のヴィーナス像が最初に読者の前にその全貌を現す場面の描写を引用して、検討してみたいと思う。この描写は Pléiade 版で約1ページ半の分量だが、ここに引くのはその4分の1ほどであ

る。

《La chevelure, relevée sur le front, paraissait avoir été dorée autrefois. La tête, petite comme celle de presque toutes les statues grecques, était légèrement inclinée en avant. Quant à la figure, jamais je ne parviendrai à exprimer son caractère étrange, et dont le type ne se rapprochait de celui d'aucune statue antique dont il me souviennne. Ce n'était point cette beauté calme et sévère des sculpteurs grecs, qui, par système, donnaient à tous les traits une majestueuse immobilité. Ici, au contraire, j'observais avec surprise l'intention marquée de l'artiste de rendre la malice arrivant jusqu'à la méchanceté. Tous les traits étaient contractés légèrement : les yeux un peu obliques, la bouche relevée des coins, les narines quelque peu gonflées. Dédain, ironie, cruauté, se lisaient sur ce visage d'une incroyable beauté cependant. En vérité, plus on regardait cette admirable statue, et plus on éprouvait le sentiment pénible qu'une si merveilleuse beauté pût s'allier à l'absence de toute sensibilité.》⁴³（下線筆者）

この描写は二つの機能を果たしている。ひとつは、もちろん、怪奇譚としての *La Vénus d'Ille* の物語進行上重要な意味を担っていることである。語り手が、そして読者がこのヴィーナス像から受けるとことなく気味のわるい印象, *dédain, ironie, cruauté, l'absence de toute sensibilité* といった言葉で表現されている印象, いわば不吉な予感が、現実のものとなってゆく過程こそが、*La Vénus d'Ille* のプロットを形成していると言ってもよいのである。もうひとつは、古典主義的な美学に対抗した新しいいわゆるロマン主義的な美学を提示するという機能である。とくに引用文中下線を付した個所には、メリメの調査旅行中のある経験が色濃く反映している。メリメは第一回の調査旅行の途中立ち寄った Vienne の近くの Sainte-Colombe という村で古代のヴィーナス像を見て感銘を受ける。そして、旅先から Jenny Daquin に宛てた手紙にその印象を述べ、その中で次のように言っている。

J'ai vu à Vienne, il y a quelques jours, une statue antique qui a bouleversé toutes mes idées sur la statuaire romaine. J'avais toujours vu le beau idéal de convention intervenir dans l'imitation de la nature. Là, c'est tout différent.⁴⁴

また、その翌年にまとめた *Notes d'un voyage dans le midi de la France* でもこのヴィーナス像に触れてその全容をかなり詳しく記述しているが、その中に、

Jusqu'alors j'avais pensé que les anciens avaient toujours surbordonné l'imitation de la nature à un certain type idéal du beau absolu, [...] Un peu moins scrupuleux que leurs maîtres, les Romains ont cependant toujours idéalisé leurs modèles, et même en figurant des monstres fantastiques, ils ne se sont pas écartés entièrement du *beau*.⁴⁹

と言うところがある。メリメは、Sainte-Colombe で古典主義的なものとはまったく異った美の概念にもとづいて造られたヴィーナス像に出会って、その写実性に驚きをともなった感動を受けたのだが、メリメの古典主義美学のとらえかたが上の引用文中によく示されていると思う。ギリシャ・ローマの古代美術の偉大さは認めながらも、それを唯一無二の美の基準とする古典主義に異を唱え、新しい美の概念を確立したのがロマン主義であるのは、周知のことである。メリメもロマン主義運動の最盛期に青年期を過ごし、もっとも非古典主義的なもののひとつである中世美術の存在意義を確立し啓蒙することを職業とした作家であった。Sainte-Colombe のヴィーナス像を前にしたメリメの感動は、探し求めていたものを発見した喜びの表現であったのである。そしてその経験が *La Vénus d'Ille* の中にこれほど直接生かされていることは、作品の特徴として特筆すべきものであろう。*Essai sur l'architecture religieuse au moyen âge particulièrement en France* において中世独自の建築美学を再構成しようとするメリメと小説家メリメとが *La Vénus d'Ille* においては見事に共存している。

II-3. 学問と文学の幸福な出会い。

La Vénus d'Ille は、メリメが歴史記念建造物総監督官という天職を得た時

期、生涯でもっとも充実していたころの作品である。そこではメリメの学者としての能力と小説家としての才能が均衡している。メリメは博学と文才の調和を意図し、その目的を遂げた。少なくとも、彼自身そう考えていたのである。事実、メリメのペダンティックともいえる語り口が、作品の統一感をいささかも損なうことなくその魅力の源となっている点では他に類を見ない。晩年の作 *Lokis* がかりうじてこの *La Vénus d'Ille* に拮抗する完成度を示すのみである。Jean Mallion・Pierre Salomon の指摘するように、

Il [Mérimée] a passé sa vie à osciller entre la littérature proprement dite et l'érudition, non sans essayer de les marier l'une à l'autre.⁶⁰

と言うことであり、*La Vénus d'Ille* の際立った特徴は、

[...] nulle part chez Mérimée les préoccupations de métier et la littérature proprement dite ne se rejoignent autant.⁶¹

と言う点なのである。いわゆる博識がメリメの存命当時隆盛を極めた幻想小説、後には、推理小説や SF 小説などの大衆文学において作品の効果を高めるためにおおいに利用されているのは周知のことだし、メリメの小説にしばしば見られる銜学趣味的な傾向も多くの場合その域を出るものではない。かといって、学者的な博識は、ただ単に文学に奉仕しているだけだ、とも言えないのである。メリメが職業として選んだのは、事実の世界を対象とする学問であった。フランスの伝統である合理主義、その十九世紀的展開といえる科学主義は、メリメの思想の核を形づくっているのである。もっとも、この科学主義は合理主義を想像力の世界、精神世界にまで適用して文学を改革し、世界観の革新を目指すようなものでもなかった。中世美術を前にして、その神秘主義的な解釈をことごとく退け、細部にいたるまで合理主義的解釈を丹念に積み重ねてゆく姿に、メリメの思想の真髄を見る思いがするのである。つまり、メリメにとっては世界は厳然たる事実として、理性によって理解し得る透明なものとしてそこにある。そして、文学というものもそのような揺るぎない世界と関わっ

てゆく方法・手段の一つなのである。そこに、学問と文学の併存の可能性が生れ、*La Vénus d'Ille* においてその可能性が満足すべき実現を見たと言える。

III-1. 幻想小説としての *La Vénus d'Ille*

本論ではここまで *La Vénus d'Ille* の幻想小説としての特徴にあまり触れずに来た。その点に関しては語り尽くされた感があるというのもその理由の一つであるが、これまで検討してきたものを小説の文脈から切り離してみることで見えてくるメリメの文学の特徴に注目してみたかったからでもある。もちろん、*La Vénus d'Ille* をメリメが傑作だと自賛している第一の要因は、そういったものが作品の幻想小説としての完成度を高めるために十二分に機能していることであろう。ただそれもメリメの極めて合理的な世界観が産みだしたものであった。そして、そのような世界観はメリメ一個人のものではなく、彼が所属していたある特定の集団のものであった。メリメの目的は、幻想小説という極めてロマン主義的なジャンルにおいて、合理主義の立場からの創作の可能性を示すことであったのではなかろうか。最後にそのあたりのことを考えてみたいと思う。

Pierre-Georges Castex はメリメの幻想小説の特徴を次のように的確にまとめている。

Mérimée possède aussi cette ingéniosité cruelle qui épuise les hypothèses logiques et qui contraint la raison à se contredire en acceptant l'irrationnel. [...] Nous évoluons dans un univers que le réalisme du conteur a su nous rendre familier ; tout à coup, sans pouvoir reculer, nous voilà de plain-pied avec le merveilleux.⁹⁸

つまり読者が理性によって判断して真実であると認めざるを得ないような細部を丹念に積み重ねてゆき、その結果として超自然の存在を否定できないところまで読者を導いてゆくのである。その手際の良さに幻想小説家メリメの真骨頂がある。*La Vénus d'Ille* では、小説のあらゆる細部がアルフォンス殺人の

犯人は青銅のヴィーナス像であることの状況証拠となっていて、読者はそれ以外の可能性を抛棄せざるをえないのである。理性による論理的な推理のはてに超自然が姿を現すのである。そこに恐怖心が生ずる。ただ、J. Mallion・P. Salomon は *La Vénus d'Ille* におけるメリメの手法に探偵小説と似通ったものがあることを指摘している。たしかにメリメが読者を超自然の世界へと誘う方法と、名探偵の明晰な推理には共通点がある。そして、推理小説にでてくる殺人事件が我々読者にはけっして恐ろしいばかりのものではないように、メリメの描く恐怖には何かしら心地好いものが含まれているように思えるのである。

III-2. 合理的世界の再確認としての幻想小説

この心地好さの中にメリメの幻想小説の意味が隠されているような気がする。もう一度 P. -G. Castex の言葉を引用してみよう。

《Aux fictions surnaturelles, il est complaisant, car elles transposent des inquiétudes dont un esprit vraiment profond ne saurait jamais se dire tout à fait affranchi ; mais non pas crédule, car elles empruntent des formes dont l'intelligence critique dénonce aisément l'illusion. Comme par jeu, il leur donne corps dans ses récits et parvient souvent par la vertu de son art à les rendre réellement effrayantes ; mais, jusque dans ses inventions les plus redoutables, il demeure un dilettante de la peur.》⁹⁹

メリメの描く超自然の世界は彼の合理主義的な世界観と基本的に対立しないものなのである。メリメの幻想小説では、反理性用な超自然を世界の本質と関わるものであると信じている作者が、世界とは理性のみで理解しうるものであるとする読者を説得する、という図式は成立しない。作者は超自然の存在の可能性を読者とともに楽しんでいるに過ぎない。そして超自然は決して双方の世界観において本質的に重要な意味を持ちえないのである。メリメの幻想小説は、むしろ、合理主義的世界観の再確認・強化という意味を持つ。幻想小説を文学の一ジャンルとしてその存在価値を認め、それと同時に、その知的娯楽性

を前面に出すことで反理性的世界を理性的世界の下位に置き、人間のなかにある非合理的・神秘主義的嗜好を、人間性にとって二次的なものとして確定してしまうという効果を、メリメは考えていたのではなかろうか。十九世紀を科学の世紀であると規定することは一般的に認められている。それは従来非合理的・神秘的と考えられていたものに理性の光をあてるための努力の営々とした積み重ねがなされたためにはかならない。そして、メリメにとっての生涯を賭けた仕事が宗教的・神秘主義的解釈の対象としてのみ扱われていた中世美術・中世建築を、合理主義的解釈の対象として再認識することであったことを思いだしてみれば、彼が傑作であると自賛する *La Vénus d'Ille* がその仕事の出発点で書かれたことを、偶然の一致で片付けてしまえないように思えるのである。

結 び

メリメが *La Vénus d'Ille* を傑作であると自認するのは、この作品において博識と文才の類いまれなる調和が見られるためだと、筆者は考えている。それはメリメが生涯求め続けたものであり、メリメ個人の世界観と深く関わっている。そして、彼が職業として選んだ役人としての活動、つまり、フランスの古文化財の保護・修復を目的とした中世美術の調査・研究と、彼の文学的な創作活動との間に共通するものを見定めること、それがメリメの思想・世界観を理解するために必要不可欠な手続きであると思えるのである。筆者は今のところその思想の核になるものを合理主義という言葉で表現している。それは、もっと正確には、自由主義的合理主義と呼んだほうがいいものかもしれない。十九世紀初頭のロマン主義運動を通してひとつのグループを形成していった思想である。王政復古期に青年時代を過ごし、七月王政期に権力の中枢を占めたこのグループに所属していたことは、メリメの一生にとって決定的な意味を持つ。そ

して、メリメの文学作品は、すべてこの思想と関連づけて読む必要があるように思える。筆者はまだその思想がどんなものであるかを明確に表現することはできずにいる。メリメ自身歴史に深い興味を持ち、彼の所属するグループが十九世紀フランス歴史学の創始者たちを輩出していることを考えると、歴史研究と深い関わりを持つものであるという印象はある。そだそれは、*La Vénus d'Ille* に見られるように、超自然な出来事も取り込んでしまえるようなものでなくてはならない。幻想小説という文学のジャンルも、十九世紀に生みだされたものである。筆者が現在、合理主義という言葉で示しているものの実体が明らかになれば、メリメという作家の核を成しているものを明確にでき、と同時に十九世紀フランスのロマン主義運動の持つ意味の一つを示すことができる、と考えるのである。

テキスト

本文中メリメの作品からの引用はすべて、Mérimee : *Théâtre de Clara Gazul, Romans et nouvelles*, édition établie, présentée et annotée par Jean Mallion et Pierre Salomon, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1978, からとし、Pléiadeと略記する。またメリメの手紙からの引用はすべて Prosper Mérimée : *Correspondance générale*, établie et annotée par M. Parturier, P. Jossierand, J. Mallion, Vol. I-VI, Paris, Le Divan, 1941-7 ; établie et annotée par M. Parturier, Vols. VII-XVII, Toulouse, Privat, 1953-64 とし、C.G. と略記する。

註

- (1) C.G. Vol. VIII, pp. 251-244.
- (2) メリメのこの著作に関しては、拙稿「メリメと中世再認識—メリメの合理主義に関する一考察—」, 年報・フランス研究第18号, 昭和59年, 参照。
- (3) これらの著作の現行版としては, Prosper Mérimée : *Notes de Voyages*, présentées par Pierre-Marie Auzas, Hachette, 1971. がある。
- (4) Notice, in Pléiade. pp. 1478-1486, 参照。この Notice には, sources に関する諸研究がまとめられており, おもな参考文献も知ることができる。
- (5) Pierre Moreau : “Mérimée contre le moi”, in *Revue d'histoire littéraire de la*

- France, janvier-février, 1971, pp. 32.
- (6) Jean Decottignies : “《IL VICCOLO DI MADAMA LUCREZIA》 L’élaboration d’une nouvelle de Mérimée”, in *Revue d’histoire littéraire de la France*, 1964, pp. 589-604.
- (7) Notice, in *Pléiade.*, p. 1478.
- (8) C.G. Vol. IV p. 200.
- (9) *Pléiade*, p. 729.
- (10) *Pléiade*. p. 736.
- (11) Pierre Trahard : *Prosper Mérimée de 1834 à 1855*, Paris, Champion, 1928, p. 99.
- (12) Parturier に関しては, Notice, in Prosper Mérimée : *Romans et Nouvelles*, Tome. II, Garnier, 1967, pp. 81-4, Jean Mallion, Pierre Salomon, に関しては, *Pléiade*. pp. 1481-1483参照。
- (13) *Pléiade*. p. 738.
- (14) C.G. Vol. I , pp. 324-325.
- (15) in Prosper Mérimée : *Notes de Voyages*, présentées par P. -M. Auzas, Hachette, 1971, pp. 95-96.
- (16) Notice, in *Pléiade*. p. 1216.
- (17) Notice, in *Pléiade*. p. 1486.
- (18) Pierre-Georges Castex : *Conte Fantastique en France de Nodier à Maupassant*, José Corti, 1951, pp. 282-3.
- (19) Castex, *op. cit.*, pp. 249-50.

(文学部非常勤講師)